

その日は珍しくうなだれながらやってきた「ひまわり」ちゃん。

「どうしたの？」と聞いても、押し黙っている。お母さんが笑いながら「大丈夫です。ちよっと拗ねているだけです」と言う。

二階の相談室にあがって、ソファに座って話を聞く。というか、そっとしておく。次第にところがほぐれてきたのか、ぽつりぽつりと話し出す。肩のあたりが、まる虫くんのように丸くなっていて、フリースの上着がもこもこして見える。三日前から、何でか分からないけど気分が落ち込んで、ご飯も食べたくない。「それなのに、よく来てくれたねえ。来るのは嫌じゃなかった？」「うん」「からだが丸くなってるよ。ずっとそうなの？」「家ではちがう」「そうなんだ。じゃあ、車から降りて、ころがりながら来たの？」「ここでやっとクスクス笑ってくれる。「そんなわけないじゃん」

そして、夕べ見た夢を語ってくれた。

「友だちが友だちでなくなる夢。離れていってしまふ。悲しかった。起きたら、泣いてた」「その友だちは誰だったか、わかる？」「知らない子」「知らない子で良かったね。つらかったね。そして、もしかしたら現実にも、そういうことがあったということかな」「ひまわり」ちゃんは深くうなずいた。もう少し聞いてみたくなった。「学校に行かなくなった原因の一つは、そのことだったんだ」「うん」

友だち関係のトラブルがあったとは聞いていた。けれども、こういう形で本人が語るのは初めてだった。「つらかった」と心情を吐露するまで一年かかった。そして、ここ二年の間にすっかり学校に行かなくなり、ストレスから二十キロも体重が増えた。勉強にはついて行けなくなり、公立高校受験はあきらめた。

心療内科や精神科にも行きはじめた。担任の先生に「死にたい」とメールして、周囲を驚かせ戸惑わせたこともあった。

一年の間ずっと、「なみのね」では何をしてきたか

という、動作法でからだのバランスをとったり、夢の話の聞いたりし続けた。彼女のストーリーは壮大で、サスペンス映画やホラー映画を見ているような臨場感あふれる場面展開だった。「先生のところにはだけは、喜んで行きます」と不思議がられた。彼女はそのうちに、スマートフォンに夢を記録してくるといったようになった。そして、二人でその恐ろしい世界を楽しんだ。恐ろしいけど、笑いで包まれてもいた。私はたぶん、彼女を笑わせることができる稀有な他人だった。

「朝ごはんを食べないとダメってわかっているけど、食べられないときがある」「一食ぐらい抜いてもいいって言いたいけど、抜いたらどうなる?」「気分が落ち込む。」「そりゃ大変だ。じゃあ、食べようよ。非常食を用意しようか」また彼女はクスクス笑う。「非常食って:」「ほら、カロリー何とかとか、そのたぐいの美味しいの、コンビニに売ってるよね」「ああ、あれ食べたことある。おいしかった」「それを用意して、あとは、牛乳とか、野菜ジュースとか、何かカロリーがあるものを用意しようよ」

その日も、帰るころにはすっかり元気になって、彼女は玄関先でハイタッチをして帰っていった。

過去は変えることができる。でも、現在と未来は変えることができる。その希望を彼女とともに歩くしかない。

そう、動作法では、過去を問題としない。つらいこと、悲しいことがあったことをメインの話題にはしない。もちろん、話に上ることはあるけれど、だからといって、それに振り回されたりしない。掘り返して話題にしても、それは一つの解釈にすぎない。前を向いて、地球の上に乗って、背骨をまっすぐに立てて、地球をころがすように生きていこう。

彼女には夢がある。Vチューバーになるという夢。尊敬するVチューバーが夢に出てきたときは、すごく嬉しそうだった。知らない人たちとバスに乗って、笑いながら「ヤツホー」と言っている彼女。「そういうふうになるよ。きつとなれるよ。ひまわりちゃん、太陽のまわりを回って、みんなに元気をあげる人になれるからね」そんな日が来ると信じている。